（抄録）

研究課題名：認知的方略に応じたプロセスフィードバックに関する検討

研究代表者名：髙橋由衣

近年，物事を悪い方向に考えることによって成功している防衛的悲観主義の存在が明らかにされている．有冨・外山（2017）は「悲観的予期」と「熟考」を特徴とする防衛的悲観主義（Norem, 2001）において，競技に対する心配事がアスリートの不安の軽減や対処行動を導くなど，防衛的な機能を果たす思考になり得ることを示唆している．このように先行研究では，「否定的な思考や感情は取り除く」という考え方から，「否定的な思考や感情はそのままでよい」という考え方に変化していることが窺える．しかしながら，現状では認知的方略におけるアスリートのパフォーマンス発揮のメカニズムまでは解明するに至っていない．そこで本研究の目的は，課題実施前のアスリートの熟考と，課題実施後に研究代表者が与えるプロセスフィードバックがパフォーマンス発揮に及ぼす影響について検討することとする．なお，本研究では新型コロナウイルス感染症の影響により，十分な実験参加者を集めることができなかったことから，プロセスフィードバック後の状態不安得点，課題努力，パフォーマンス得点，心拍数の観点から認知的方略ごとのパフォーマンス発揮のメカニズムについて検討した．実験参加者は A 大学の大学生アスリート 23 名であり，実験課題には点つなぎ課題を使用した．はじめに，実験参加者をいくつかのパターンに分類するため，認知的方略尺度の各下位尺度の標準得点に基づいて Ward 法による階層的クラスター分析を行った．その結果，認知的方略尺度の下位尺度の組み合わせによって SO 群と RP 群が存在することが明らかになった．次に，認知的方略のパフォーマンス発揮のメカニズムを状態不安得点の観点から検討した結果，群と条件に有意な交互作用が認められ，熟考ありの RP 群は熟考ありの SO 群よりも有意に得点が高いことが明らかになった．この結果は，元々不安傾向が高いという RP 群の特徴が反映された結果であったといえる．しかしながら，本研究では，物事を悪い方向に考えることによって成功している防衛的悲観主義の存在が確認されなかったことや，課題努力，パフォーマンス得点，心拍数に有意な差がみられなかったことなど，本研究の目的を達成するに至っていない．今後は，新たに実験参加者を増やし，認知的方略毎のパフォーマンス発揮のメカニズムについて詳細に検討していく必要がある．